Mr. Bassman（ベースマン列伝） Vol.7

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変…。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥ぐともの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Doug Watkins【ダグ・ワトキンス】

Photo by Francis Wolff (c) Mosaic Images

Profile

1934 年 3 月 2 日ミシガン州デトロイト生まれ。本名はダグラス・ワトキンス。カス・テック・ハイスクールでは同級生であったポール・チェンバース（b）とはいとこ同志（年齢はダグ・ワトキンスの方が 1 歳年上）の関係で、同校の上級生ドナルド・バード（tp）とも学友だった。10 代半ばの頃に、ガストン・ブローハンの元でベースを学び、同郷のバリー・ハリス（p）とギグを重ね腕を磨く。53 年夏にジェームス・ムーディ（ts）のバンドのツアーに参加し、プロとしての活動を開始。その後、再びバリー・ハリス・トリオに加わり、デトロイトを訪れたコールマン・ホーキンス（ts）、チャーリー・パーカー（as）、スタン・ゲッツ（ts）等と共演を果たす。54 年夏に、同郷のケニー・バレル（g）、カーティス・フラー（tb）、ペッパー・アダムス（bs）、ポール・チェバース（b）等と共に NY 進出を果たし、ケニー・ドーハム（tp）のグループで活動後、アート・ブレイキー＆ザ・ジャズ・メッセンジャーズに初代ベーシストとして参加。同年 9 月にホレス・シルバー（p）と共に同グループを脱退し、ホレスのクインテットに参加。その後は、ソニー・ロリンズ（ts）、ドナルド・バード（tp）、ハンク・モブレー（ts）、ジャッキー・マクリーン（as）、リー・モーガン（tp）等多くのレコーディングに参加し、プレスティッジのハウス・ベーシストとして活躍。また、50 年代終わり頃からは、チャールス・ミンガス（b）のワークショップに参加するなど、ハード・バップ全盛期における売れっ子ベーシストのひとりとして活躍した。1962 年 2 月 5 日、自動車事故により急死。享年 27 歳。

27 歳という若さで夭逝した伝説の天才ベーシスト

≪クールで豪快、玄人好みの若きベースマン≫

ダグ・ワトキンスといえば、アート・ブレイキー＆ザ・ジャズ・メッセンジャーズの初代ベーシストとして、また、同じくベーシストのポール・チェンバース（＝以下 PC）とはいとこ同志であることでも知られるが、そのベース・プレイに関しては、ソニー・ロリンズのアルバム『サキソフォン・コロッサス』でのプレイが一番有名だろう。“ミスター・ベース”こと、ロン・カーターもダグ・ワトキンスに関してはこのアルバムを挙げ、「信じられないようなサウンドを持ったベーシストだった」と語っているように、PC ほどの派手さはないが、一本筋が通った男気を感じさせるようないぶし銀のウォーキングは彼ならではの一級品だ。プライベートで PC とどんなベース談義を交わしていたかは定かでないが、盟友ドナルド・バードのアルバム『バード・イン・パリ』では、PC 縁のナンバー「ディア・オールド・ストックホルム」や「ポールズ・パル」をプレイするなど、互いに認め合う良好な仲であったことが想像できる。また、あのチャールス・ミンガスのジャズ・ワークショップでは、ピアノを弾くミンガスに代わりベースを担当した。

そんなダグ・ワトキンスは、1962 年 2 月 5 日の深夜、フィリー・ジョー・ジョーンズのニュー・コンボに参加する為、NY からサンフランシスコへ向かう途中、アリゾナ州ホルブルックのハイウェイでピックアップトラックと衝突…。愛車と共に 27 年の生涯を閉じた。

19 歳でのプロ・デビューから約 8 年という短い活動期間ながら、多くの名演を残してくれたそのベースマン魂は永遠だ！

≪モータウンが生んだジャズマンたち≫

ダグ・ワトキンスの出身地米国ミシガン州デトロイトは、世界有数の自動車産業の街（モーター・タウン）として知られ、ソウル・ミュージックの名門レーベルでも有名な「モータウン」という愛称で呼ばれる。そして、このモータウン出身のジャズマンが多いことは有名だ。バリー・ハリス（p）、ポール・チェンバース（b）、ケニー・バレル（g）、トミー・フラナガン（p）、ドナルド・バード（tp）、カーティス・フラー（tb）、ペッパー・アダムス（bs）、ルイ・ヘイズ（ds）、近年ではジェームス・カーター（ts）などざっと挙げただけでも、錚々たる顔ぶれが揃っている。

≪自動車事故で亡くなったジャズ・ミュージシャン≫

以下（楽器 / 没年）… ベッシー・スミス（vo/1937）、ハーシャル・エバンス（b/1939）、チュー・ベリー（ts/1941）、ハービー・ハイマー（ts/1949）、クリフォード・ブラウン（tp/1956）、リッチー・パウェル（p/1956）、カール・パーキンス（p/1958）、スコット・ラファロ（b/1961）、エディ・コスタ（p, vib/1962）、ミード・ルクス・ルイス（p/1964）、ウィリー・デニス（tb/1965）、デイヴ・ランバート（vo/1966）、スティーブ・ボハナン（ds, org/1968）、ニック・スタビュラス（ds/1973）、ジョー・ベンジャミン（b/1974）、ボブ・バーグ（ts/2002）… などなど、ダグ・ワトキンスと同じく、自動車事故で命を落したジャズ・ミュージシャンは多いが、その偉大な功績は宝だ。

DW's Leader Album

単独名義のリーダー作 2 枚と盟友ドナルド・バードとの共同名義によるリーダー作 1 枚を残しているダグ・ワトキンス。ベースと共にチェロの名手でもあったその天性のプレイをじっくりと味わって欲しい！

トランジションに残したハード・バップの金字塔。ダグの初リーダー作！

Watkins At Large
Doug Watkins
(東芝 EMI：TOCJ-9254)

Doug Watkins (b), Donald Byrd (tp), Hank Mobley (ts), Kenny Burrell (g), Duke Jordan (p), Arthur Taylor (ds)

1. Return To Paradise 2. Phinupi 3. Phil T. McNasty's Blues 4. More Of The Same 5. Panonica

1955 年から 3 年ほどの活動期間で幕を閉じたトランジション・レーベルにて、1956 年 12 月 8 日に録音されたダグ・ワトキンスの記念すべき初リーダー作！　若干 22 歳のダグが故郷デトロイトで、同郷の K・バレル（g）と D・バード（tp）に、D・ジョーダン（p）、H・モブレー（ts）、A・テイラー（ds）を従えて吹き込んだハード・バップの傑作！　D・ジョーダン（当時 34 歳）以外の 5 人は皆 20 代で、当時の東海岸ジャズ・シーンで脚光を浴びていた精鋭たちだ。そんな若きパワーと才能が迸るナンバー 5 曲を収録。決して出しゃばらず、ベースの真髄を聴かせるダグ。「モア・オブ・ザ・セイム」や「フィナッピ」で聴ける魂のウォーキング・ベースを是非とも聴いて欲しい。

ユセフ・ラティーフをフィーチャーしチェロのピチカートで挑んだソロ第2弾

Soulnik
Doug Watkins Quintet featuring Yusef Lateef
(Prestige/NEW JAZZ：OJCCD-1848-2)

Doug Watkins (cello), Yusef Lateef (fl, ob), Hugh Lawson (p), Herman Wright (b), Lex Humphries (ds)

1. One Guy 2. Confessin' (That I Love You) 3. Soulnik 4. Andre's Bag 5. I Remember You 6. Imagination

ジャケットを見ての通り、二枚目のリーダー作となる本作では、本業のベースをハーマン・ライトに任せ、ダグは全編チェロのピチカートを披露。しかも録音の 3 日前にチェロ奏者から楽器を借りたばかりで、これが初のチェロ演奏だったというから驚きだ！　5 人編成で、フルートとオーボエをプレイするユセフ・ラティーフをフィーチャーした作品だけあって、激しくブイブイと押しまくるジャズはないが、ベースよりも高音でギターとピアノの中間のトーンを響かせるダグのチェロが絶妙なファンキーさを醸し出す。ユセフ・ラティーフ作曲の「ワン・ガイ」「ソウルニク」に、ダグのオリジナル「アンドレズ・バック」を含めた全 6 曲収録で、ヒュー・ローソン（p）とレックス・ハンフリーズ（ds）の好演も光る！ 1960 年録音。

盟友ドナルド・バードとの"Co-Leader"名義によるトランジション・セッション集

The Transition Sessions
Donald Byrd & Doug Watkins
(Blue Note：40528)

Donald Byrd (tp), Doug Watkins (b), Hank Mobley (ts), Kenny Burrell (g), Horace Silver, Duke Jordan (p), etc

(Disc-1) 1. Doug's Blues 2. El Sino 3. Crazy Rhythm 4. Everything Happens To Me 5. Hank's Other Tune (AKA The Late Show) 6. Hank's Tune ⋯ 10 / (Disc-2) 1-7

このアルバムは、1955~56 年にドナルド・バードとダグ・ワトキンスがトランジション・レーベルで行った 3 つの異なるセッションの音源を収めたもの。その内 1 つは、左に紹介している『ワトキンス・アット・ラージ』からのセッション（Disc 2 #1-5）で、他の 2 つはドナルド・バードのリーダー・アルバム『バーズ・アイ・ビュー』（Disc-1 #1-6）と『バード・ブロウズ・オン・ビーコン・ヒル』（Disc-1 #7-10 & Disc-2 #6-7）からのセッションだ。オープニングを飾る「ダグズ・ブルース」は、文字通りダグ作曲のオリジナル・ブルースだが、この 3 つのセッションをまとめて聴けるなんて贅沢この上ない！　盟友ドナルド・バードとダグの抜群の相性を実感すると共に、若きダグのウォーキングを心ゆくまで堪能できる作品だ！

DW's Support Album

27 年という短い生涯ながら、ジャズ史を飾る名盤の数々において、リーダーたちのプレイを際立たせ、印象深く魂のこもった低音の魅力＆ジャズ・ベースの真髄を聴かせてくれた。

Horace Silver & The Jazz Messengers
Horace Silver
(東芝 EMI：TOCJ-1518)

「アート・ブレイキー＆ジャズ・メッセンジャーズ」正式発足以前の「ホレス・シルヴァー＆ザ・ジャズ・メッセンジャーズ」名義の歴史的重要作品。名曲「ドゥードゥリン」なども収録。1954 ＆ 1955 年録音。

New Trombone
Curtis Fuller
(ビクターエンタテイメント：VICJ-41290)

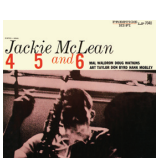
カーティス・フラー（tb）の初リーダー作品で、ジャケットも渋い！　ハード・バップ全盛期のファンキーでパワー漲る名盤でダグのベースと共にトロンボーン・ジャズの魅力を知るには最適！　1957 年録音。

Saxophone Colossus
Sonny Rollins
(ビクターエンタテイメント：VICJ-41501)

ご存知、トミー・フラナガン（p）、ダグ・ワトキンス（b）、マックス・ローチ（ds）を従えたソニー・ロリンズ（ts）のジャズ史に輝く超名盤。ダグのベースが光る「ブルー・セブン」など聴き所満載！ 1956 年録音。

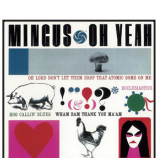
Candy
Lee Morgan
(東芝 EMI：TOCJ-6416)

ソニー・クラーク（p）、ダグ・ワトキンス（b）、アート・テイラー（ds）の強力ピアノ・トリオをバックに、弱冠 20 歳のリー・モーガン（ts）が吹き込んだ唯一のワン・ホーン・カルテット作品。1958 年録音。



4,5 & 6
Jackie McLean
(ビクターエンタテイメント：VICJ-41546)

タイトルが示す通り、カルテット、クインテット＆セクステットの三様編成で挑んだ若きジャッキー・マクリーン（as）の初期の名盤！　全曲参加のダグのベース・ワークもいぶし銀の輝きを放つ。1956 年録音。



Oh Yeah
Charles Mingus
(ワーナーミュージック・ジャパン：AMCY-1249)

あのチャールス・ミンガスがピアノとヴォーカルを担当し、ベースは全てダグに任せた異色アルバム。ブルージーでブギー且つパワフル＆ソウルフルな作品。ローランド・カークの存在も光る。1961 年録音。